

(別紙様式3)

令和4年度あいちラーニング推進事業研究報告書

学校番号 121

学校名 愛知県立 西尾 高等学校

校長氏名 鈴木 雅文

研究責任者職・氏名	教諭・ 伊藤 公彦	事務担当者職・氏名	主事・ 大山 友綺
研究テーマ	観点別学習状況の評価を踏まえた、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の推進		
本年度の研究目標	(1) 各教科の「指導と評価の一体化」に資する研究とする。 (2) 主体的・対話的で深い学びの視点から、生徒の「思考・判断・表現」の観点別学習状況の評価する場면을効果的に設計した授業改善を進める。 (3) 「学びに向かう力、人間性等」を育成する観点から、主体的・対話的で深い学びを目指す授業改善の中で、「主体的に学習に取り組む態度」を適切に評価する。 (4) 先進校の主体的・対話的で深い学びの優れた実践を十分に活用しながら、「指導と評価の一体化」を目指す。		
研究の実施内容			
実施月日	内	容	備考 (対象生徒等)
9月15日	・教育課程委員会 事業の趣旨説明、今年度研究担当の3教科(地歴公民科・数学科・英語科)へ研究の委嘱		教科主任
9月28日	・第1回西三東南地区連絡協議会 主管校および重点校の本年度の研究計画及び現状について情報交換		主管校・重点校 担当者
11月1日	・先進校訪問【県立時習館高校】		英語科教員2名
11月8日	・重点校訪問【県立岡崎商業高校】		教務主任
11月14日	・重点校訪問【県立一色高校】		数学科教員1名
11月15日	・重点校訪問【県立吉良高校】		家庭科教員1名
1月17日	・第2回西三東南地区連絡協議会 主管校および重点校の本年度の研究状況及び現状について情報交換		主管校・重点校 担当者
1月25日	・重点校訪問【県立岡崎工科高校】		英語科教員1名
3月16日	・公開授業及び研究協議会の実施 3教科の公開授業及び研究協議会を実施		西三河地区県立 高校から19名の 参加者

研究成果の評価及び普及・還元に関する実績

1 本年度の研究の概要

(1) 研究テーマ

本校では「観点別学習状況の評価を踏まえた、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の推進」をテーマに研究に取り組んだ。進学校である本校ではこれまで定期考査に重きを置いた評価を実施してきたが、1年生が新学習指導要領の学年となり観点別評価に取り組むことになった本年度、あいちラーニング推進事業主管校となったことを機に、指導と評価の一体化を目指し各教科で評価の改善に取り組むこととした。

(2) 観点別評価に向けた取り組み

ア 観点別評価の枠組み

従来は定期考査の点数にその他の評価を加味して評点を計算し、評点を基に評定を算出してきた。この枠組みに対して、本校では以下のような形で観点別評価を導入した。まず、全体の中で各観点をどれだけの重みで評価するか、合計が100となるように重みづけを決める。そして、定期考査およびその他の評価について、その割合に合わせて数値化して評価する。観点別の点数が満点に対して何割に達しているかによって観点別のABC評価を定めるとともに、観点別の点数を合計したものを評点とし、評点によって評定を定める。なお、観点ごとの重みづけの割合は各教科の裁量で定めることにした。

イ 評価規準の策定と提示

教科ごと、単元ごとでそれぞれの観点をどのような場面で評価するか、またどのような規準で評価するかを策定し、生徒へ提示することとした。定期考査において観点別に採点するだけでなく、考査以外の場面での評価についても各科目1枚の書面にまとめ、ロイロノートを用いて生徒に配付した(資料1)。これは、生徒に学習のポイントを示すとともに、配付する書面を作成する中で各教科の教員の観点別評価への意識が高まることも企図したものである。

【現代の漢語】 令和4年度 観点別評価規準

項目	観点別評価規準	評価規準			
		100点満点	80点満点	60点満点	40点満点
読解力	本文の内容を正確に理解し、要約し、自分の言葉で表現する能力を評価する。	○	○	○	○
表現力	自分の考えや感情を適切に表現し、相手に伝わるように書く能力を評価する。	○	○	○	○
思考力	問題や課題を自ら考え、解決策を導き出す能力を評価する。	○	○	○	○
協働力	グループで学習し、互いに助け合い、協力して課題を達成する能力を評価する。	○	○	○	○

資料1：観点別評価規準

ウ 成績処理 Excel シートの共有

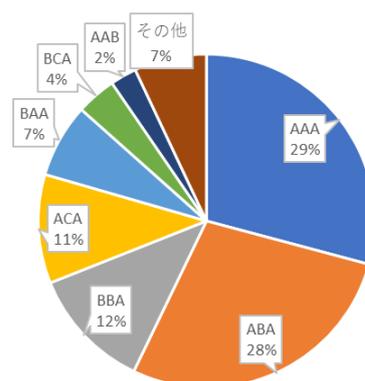
アで記した枠組みは複雑であり、処理を各教科に任せるのではなく、統一的な枠組みを作る必要がある。そこで本校では教務部で共通のExcelシートを作成し、それぞれの評価を入力すると、観点別評価を計算しスクールエンジンへ取り込みやすい形で表示されるようにした(資料2)。これにより各教科で成績処理の際に生じるミスが減らすことにつながられたと考えられる。

科目名	学 組	考査						考査以外						100点満(割合)		加重による点		ABC評定		評定			
		配点	知 識	思 考	主 体 的	配点	知 識	思 考	主 体 的	知 識	思 考	主 体 的	知 識	思 考	主 体 的	知 識	思 考	主 体 的					
番号	名前	100点満点	知 識	思 考	主 体 的	100点満点	知 識	思 考	主 体 的	知 識	思 考	主 体 的	知 識	思 考	主 体 的	知 識	思 考	主 体 的	知 識	思 考	主 体 的	評定	
1	#N/A	###				###				###			###			###			###			###	5
2	#N/A	###				###				###			###			###			###			###	4
3	#N/A	###				###				###			###			###			###			###	3
4	#N/A	###				###				###			###			###			###			###	2
5	#N/A	###				###				###			###			###			###			###	30
6	#N/A	###				###				###			###			###			###			###	1
7	#N/A	###				###				###			###			###			###			###	
8	#N/A	###				###				###			###			###			###			###	
9	#N/A	###				###				###			###			###			###			###	
10	#N/A	###				###				###			###			###			###			###	
11	#N/A	###				###				###			###			###			###			###	

資料2：観点別評価入力シート

エ 観点別評価の状況についての情報共有

評価状況について概要を整理し、成績会議や教育課程委員会で報告した（資料3）。具体的には、評点の偏りが小さくなり上位者下位者ともに減少したこと、一部にACAのようなばらつきのある評価が見られたこと、観点ごとの重みづけについて一つの観点が他の観点の2倍を超える割合を設定していた教科があったことを提示し、年度後半や次年度の評価規準を教科で検討するよう依頼した。



資料3：1学期観点別評価の概況

2 公開授業における実践

(1) 公開授業の概要

ア 日程

令和5年3月16日（木）

13:00～13:20	受付
13:20～14:10	研究授業
14:20～15:10	研究協議（分科会）
15:20～15:50	研究協議（全体会）

イ 研究授業

地歴公民、数学、英語の3教科で研究授業を実施した。

教科	授業担当者	科目名	クラス	実施場所
地理歴史	山崎 理恵	地理総合	1年7組	1年7組教室
数学	岩月 彰	数学Ⅲ	2年6組	2年6組教室
英語	松島 彩音	コミュニケーション英語Ⅱ	2年1組	2年1組教室

ウ 助言者

地理歴史	総合教育センター研究部教科研究室	研究指導主事	中元 大生 先生
数学	総合教育センター研修部基本研修室	研究指導主事	富安 伸之 先生
英語	総合教育センター研究部教科研究室	室長	内山 真一 先生

エ 参加者

西三河地区県立高校教諭 19名

(2) 地歴公民科の実践

1年生 地理総合 ハザードマップから考える水害対策

ア 目的

- (ア) 自然環境の特色と自然災害への備えや対応との関わりとともに、自然災害の規模や頻度、地域性を踏まえた備えや対応の重要性などについて理解する。
- (イ) 様々な自然災害に対応したハザードマップや新旧地形図をはじめとする各種の地理情報について、その情報を収集し、読み取り、まとめる地理的技能を身に付ける。
- (ウ) 地域性を踏まえた防災について、自然及び社会的条件との関わり、地域の共通点や差異、持続可能な地域づくりなどに着目して、「生活圏の地域性を踏まえた防災対策」などの主題を設定し、対策などを多面的・多角的に考察し、表現する。
- (エ) 身近な地域のみならず広域における防災対策について、主体的に追究しようとする態度を養う。

イ 研究準備及び方法

(ア) 前後の授業

前：日本の地形・気候と代表的な災害とその対策について学習した。

後：木曾三川・豊川水系の洪水対策を学び、愛知県全体の洪水対策を考察した。

(イ) 準備したもの

生徒用タブレット、ワークシート1枚、教員用タブレット、プロジェクタ、スクリーン

(ウ) 実施方法

前時までに矢作川水系の4か所を指示し、予想される災害や対策を考察し、まとめた。

ウ 結果

(ア) ワークシート(2)～(4)の記述と発表は、教員の期待以上の成果をあげることができた。

地理院地図やハザードマップポータルサイトの様々な機能を活用し、予想される被害状況、地形などを調査し、資料として工夫・活用し、分かりやすく発表することができた。

(イ) ワークシート(5)では、対策を取るべき場所として選択したのは、1(豊田市旧小原村)

1名、2(豊田スタジアム周辺)17名、3(岡崎城周辺)18名、4(西尾市花蔵寺町周辺)

1名であった。災害が起きた際に多くの人的被害が予想される豊田市や岡崎市内を選ぶ生徒が多かった。

1を選んだ生徒は、上流で土砂が流入することにより下流への被害が出ることを予想し、選択していた。地図で提示した地域の周辺や水系全体を踏まえて意見をまとめることができた点は評価できると考える。

(ウ) 評価場面における評価(8(2))は、A27%、B73%とした。B評価の生徒は、堤防の

強化、ため池を作ること、ダムを作るといった土木的な対応、中流域(豊田市や岡崎市)を踏まえてハザードマップから災害の際の避難経路を確認するといった人々の意識を高める意見が多かった。A評価の生徒は、B評価の意見に加え、上流と中流の事例を踏まえて意見をまとめていた。今回の授業では、生徒たちは設定した評価規準を満たすことができたと考える。

A評価とした例：

- ・矢作川の上流部と下流部では、被害の種類や規模が異なる。住民などはハザードマップで被害の種類や規模、リスクの確認、行政の面では堤防やダムを必要に応じて作る。
- ・矢作川では上流では土砂災害が起こり、その土砂が下流まで流れることがあるのでしっかり土砂災害を防げるような対策をし、中・下流に堤防をつけて、さらに被害を減らす。街が形成されているからため池を作る方が大事かも。

(エ) 振り返りからは、想像よりも被害が大きいこと、地元だけでなく水系全体の洪水を考

える機会となったこと、同じような地形条件のところでも浸水被害が生じていることが理解できたといった意見がみられた。今回の学習を通して、災害に対する理解が深まるとともに、学びを今後に活かしていこうという前向きさをみることができた。

エ 考察

(ア) 生徒は積極的に活動に参加し、本時における期待した成果をあげることができた。前時

までの授業内容が定着し、考察の際に使用することができた。また、発表とその準備を通して読図などの技能やプレゼンテーション法を身につけることができた。今回の実践では、探究型学習の授業実践ができたと考える。

(イ) 一方で、wifi回線が弱く、インターネットに全員でアクセスするとつながらず生徒達

もおり、スムーズな授業運営ができない場面も多々あった。回線の増強を期待したい。

(3) 数学科の実践

2年生 数学Ⅲ 複素数平面

ア 目的

複素数平面を用いて複素数を図表示し、複素数の実数倍、和、差、積及び商の幾何学的意味について理解する。

イ 準備

(ア) 授業準備

4時間前の授業から授業開始前に、タブレットでロイロノートにログインする練習をさせた。

(イ) 課題提出

授業の問題演習をロイロノート上で行わせ、提出箱への提出を繰り返した。

ウ 方法

授業中に点の移動について確認し、点の移動の例題を提示し、その類題を作らせる。以下が評価規準である。

(ア) 提出までの時間

A : 10分以内

B : 10分～20分

C : 20分以上

(イ) 問題の質

A : 2種類以上の移動

B : 1種類の移動

C : 類題になっていないまたは解けない

(ウ) 解答

A : 時間内に解けた

B : その日のうちに解けた

C : その日のうちに解けなかった

エ 結果

(ア) 授業準備

練習の結果、授業前にロイロノートにログインすることが全員出来るようになった。

(イ) 課題提出

これも練習の結果、スムーズに提出することができるようになった。

オ 考察

(ア) 評価規準の問題の質の部分であるが、こちらの予想では半分近くはBの規準程度と想像していた。ところが、予想を大きく上回り、ほとんどの者がAであった。中には文章題にして、単純な点の移動ではなく、文章を理解する必要のある問題にまで発展させた生徒もいた。

(イ) 新しいカリキュラムにおける評価の方法として、来年度以降も研究を続けていくと面白いと感じた。

(4) 英語科の実践

2年生 コミュニケーション英語Ⅱ リーダーズシアター

ア 目的

- (ア) 高校生と同年代の盲目の少女アンバーと明るい性格の少年カイルが交わす会話の流れや、登場人物の気持ちを理解することができる。
- (イ) 音読劇（リーダーズシアター）で声や身体を効果的に使い、聴衆に情景が伝わるように表現することができる。

イ 研究準備及び方法

(ア) 前後の授業

- a より深い内容理解につなげるために教科書を読む前に、新出単語の確認を行った。
- b 内容理解のために必要な文法事項や内容に関する質問がすでに記載されているプリントを用いて、ペアで確認する場を与えながら読み進めていった。
- c リーダーズシアターについて再確認（1年生、2年生2学期に実施済み）をし、人に伝える時に何に気を付ければよいかを考えた。また、評価項目も提示し、達成する目標を確認することができた。

(イ) 準備したもの

授業の流れやリーダーズシアターについて説明するためのパワーポイント、教員用タブレット、プロジェクター、スクリーン、タイマー、スピーカー、生徒のスマートフォンまたはタブレット、新出単語プリント、内容理解プリント、音源（ロイロノートの資料箱に入れ、グループでそれぞれのパートを練習できるようにした。）、パート別のセリフプリント、教員用評価プリント、生徒用振り返りプリント

(ウ) 実施方法

クラス全体：初めの2時間はクラス全体で全てのパートに目を通し、内容理解に努めた。新出単語の読み練習は行ったが、本文の読み練習はのちにグループで練習するため行わなかった。

グループ：くじで担当するパートを決めたあと、グループでさらに内容理解を深めたり（リーダーズシアターで場面を表現するために大切な活動）、ロイロにアップされた音源を用いてセリフの練習を行ったりした。セリフの練習の際にはセリフの上に記号（強く読むところに●、間を入れるところに✓など）を書き、リズムやポーズ、トーン、強弱など工夫して読めるようにした。ある程度、内容理解とセリフの練習ができればジェスチャーを考え、発表に向けて練習した。

発表活動後：振り返りプリントには良かったグループ3つと理由を書いた。また、自分の発表を振り返り、リーダーズシアターを通して学んだことを書いた。

ウ 結果

(ア) 発表について

期待以上の発表が多く、高評価のグループが多数あった。グループそれぞれが内容をしっかりと理解したうえで、聴衆に伝わるよう話し方やジェスチャーを工夫して発表していた。

(イ) 振り返りプリントについて

良かったグループを3つ選ぶことで、生徒が集中して発表を観ることができた。集計した結果、選ばれたトップ3のグループには共通して、間の使い方が工夫されている点が挙げられた。

エ 考察

評価について

観点別評価を取り入れたのが初めてだったため、不安もあったがおおむね問題なく評価することができた。ジェスチャーに関する一部の評価基準が生徒の発表の実態と異なっていたため、今後改善していきたい。また自分の評価を客観的に振り返るために、教師や生徒同士の評価をどのようにフィードバックするか考えていく必要がある。リーダーズシアターではグループで理解を深めたり、表現の仕方を考えたりするため、それらの活動を通して主体的・対話的で深い学びを実践することができた。それは、観点別評価の「主体的に学習に取り組む態度」でもチームワーク力として評価することができた。

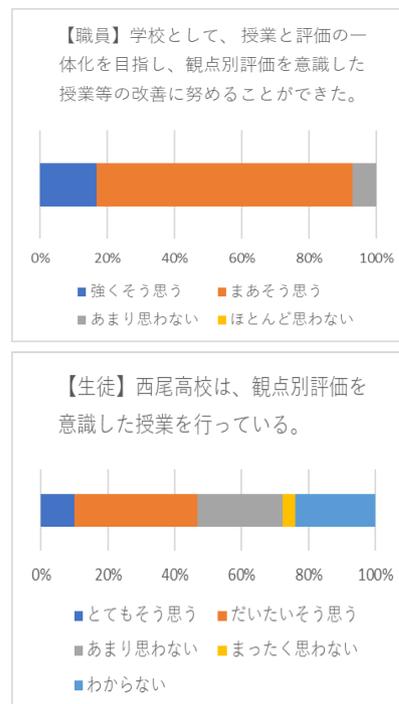
3 まとめ

右に示す2つのアンケート結果は、それぞれ本校の職員と生徒を対象とした別々のアンケートにおける、観点別評価に関する質問項目の結果である（資料4）。質問文は異なるが似た内容の質問項目に対し、職員はほとんどが観点別評価を意識した授業改善に努めることができたという回答の一方で、生徒では観点別評価を意識した授業を行っていると思うという回答は半数程度にとどまり、「あまり思わない」「わからない」が半数程度を占めるという結果である。結果の数値が大きく乖離していることから、教員が観点別評価を意識するようにはなっていない一方、その取組は生徒にはあまり伝わっていないことがわかる。

初年度となった本年度は、観点別評価を実施するための枠組み作りが中心となった。その中で、評価規準を策定し、評定を算出することについては滞りなく行うことができた。その過程で、教員集団の中で観点別評価への意識は少しずつ高まりつつある。だが、現時点では次年度へ向けて課題が残っており、特に以下に挙げる3点が課題を象徴していると考えられる。

1点目は、上記アンケート結果にあるように、生徒は観点別評価をあまり意識しておらず、そうであれば評価を学習の改善につなげることもできていないだろうということである。2点目は、教科によっては従来型の評価を実施した上で形式だけを観点別評価に乗せただけという教科もあるのが実情であり、具体的に評価をどのような方法で行うか、指導と評価の一体化をどのように実現するかといった実質的な中身の部分については、まだ研究が深まったとは言えない点である。3点目として、評価の偏りが小さくなり上位者下位者が減少する傾向にあることは、それ自体は問題があるわけではないが、適切な観点別評価の方法が確立されていないことの表れとも考えられる。

来年度、継続して研究に取り組むにあたっては、以上のような課題の解決を目指していくことになる。また、本年度は公開授業を実施する3教科を中心として研究に取り組んだが、来年度は全教科に、また新たに実施される2年生の科目にも対象を広げることになる。来年度は年度当初から研究体制を整え、さらに研究を深めていきたい。



資料4：観点別評価に関する職員・生徒のアンケート結果

※ 本研究報告書は、令和5年3月23日までに県教育委員会に提出する。